

中古仮名文学における官職表記の解釈について

——『土佐日記』『伊勢物語』を中心に——

文学研究科中国学専攻博士後期課程二年 藤田 拓海

二年前の第一〇三回大会において、私は「中古・中世文学における馬寮官人「ウマ」の解釈について——「馬」と「右馬」——」と題する研究発表をおこなった。今回の発表はそれに続くものである。

前回、古代官職のひとつである馬寮の官人について考察し、その表記が、中世文学においては多く字音となっている一方、中古文学においては和訓として解釈されるという趣旨のことを述べた。

中古・中世文学に見える官職名が、特に中世以降字音表記されるようになることは、『和名類聚抄』やキリシタン資料における表記、また、前回の発表も含めた個々の断片的な調査からでも窺うことができる。しかし、数多く存在する官職名が、いつ頃、どのような文献・状況において、和訓から字音へと変わったのか（あるいは共存したのか、また変化しなかったのか）を明らかにするためには、より広汎・体系的な調査をすることが必要である。

本発表ではこうした観点から、成立期が古くかつ伝本にも恵まれている『土佐日記』『伊勢物語』を足掛かりとして、そこに表れる官職を中心とした語の表記（読み）について調査し、考察をおこなっていくたい。

花は「咲く」のか「笑う」のか

——日本上代歌謡と

初唐歌行体の類似性

文学部教授 牧角 悦子

中国古典の詩歌において、開花を表す動詞は「開」あるいは「発」である。日本語においては、「開花」という言葉があるにも関わらず、花は「咲く」という。この「咲」という文字は「笑」の異体字なのだが、「笑」には「咲く」の意味は無い。ではなぜ日本語で、花は「咲く」というのか。

上代の歌謡が中国の古典籍から語彙や表現を多く摂取したこと、特にほぼ同時代である中国初唐の影響を強く受けていることは、すでに小島憲之が論じている。花鳥風月という日本独特の風物感覚が、初唐四傑の盧照隣・駱賓王といった詩人の歌った七言歌行における花鳥の擬人化を模したものであろうという指摘もそこにはある。

一方、中国文学史において、初唐という時期は、七言歌行という濃厚な抒情性をもった独特の歌行が爆発的な流行を見た時期であるが、近体詩を中心に論じられる現在の中国文学史の中では、等閑視されている。

しかし、初唐の歌行体の流行は、日本では反対に中国詩歌の正統として、大きな影響力を持った。花が「咲く」というのは、この初唐の歌行体における花鳥の擬人化を吸収した日本の詩歌の詩語として、ほんらい花が「笑う」という表現だったのでないだろうか。